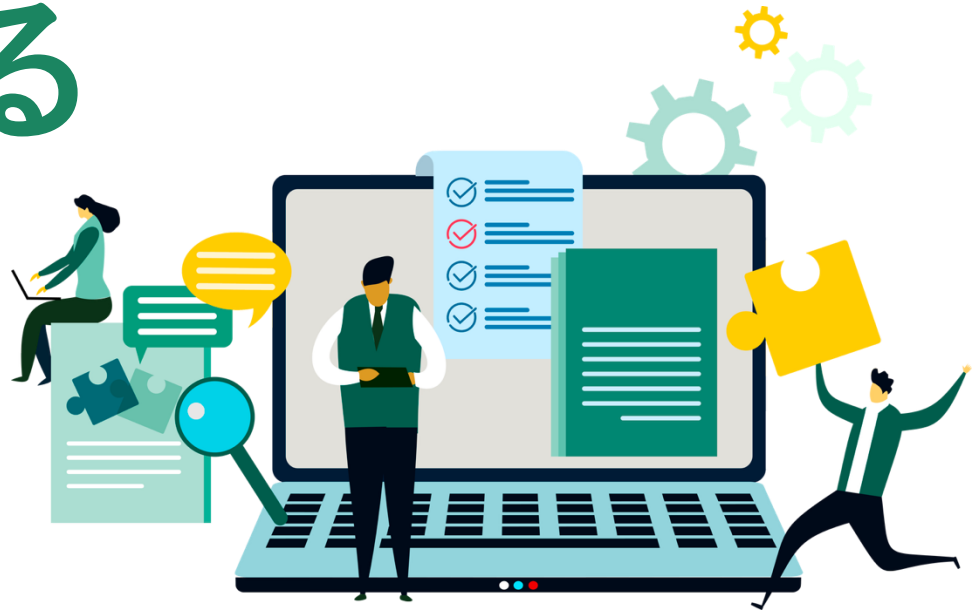
backlog by nulab

IT・通信

開発知見の属人化を解消し「組織知」へ変える

判断履歴・対応ノウハウを組織資産にする
Backlog活用ガイド



開発知見の属人化が生む課題

IT現場における業務や知識の属人化によって生じる課題についてアンケートを実施

課題 01

52.5%

障害対応の詳細が
特定担当者に属人化している

障害対応の長期化が、顧客への影響を広げる

障害対応の詳細が特定の担当者に集中していると復旧手順も確認ログも残っておらず、対応はまず当時の担当者探しから始まる。担当を探す時間の分だけ、顧客への影響は広がっていく。

課題 02

46.5%

技術選定の属人化解消に
「取り組んでいない」

属人化に手を打たないまま開発投資だけが積み上がる

技術や設計の判断が個人に閉じたままだと、追加開発のたびに調査と議論をやり直すことになる。開発投資を重ねても開発速度に結びつきにくく、成果が積み上がりにくい。

課題 03

23.5%

現在も
レガシーコードが存在する

開発力が、人の入れ替わりに左右される

書いた本人以外が意図を読み取れないため、異動や退職のたびに引き継ぎの負担が発生。人材の入れ替わりで開発力が左右される状態は、組織として開発を続けられるかの問題となる。

【アンケート調査】「仕事に関するアンケート」（調査実施：2026年8月6日～7日）本項の調査データは、「会社経営者・役員、正社員」の全体n=400の内、勤務先業種を「IT・情報通信業」と回答した人（n数＝200）が対象

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

開発知見が引き継がれない原因

多くの場合、属人化の問題は人ではなく構造にあります。どこに残すか、いつ残すか、何を残すか。
これらが決まっていない管理のあり方が、記録を個人の記憶に置き換えてしまいます。

原因 01

作業と判断理由が別々の場所に残り担当しか探せない

タスクは管理表、判断理由はチャット、資料はファイルサーバ。情報が分かれていると、対応にあたる人は複数の場所を横断して探すことに。担当本人なら思い出せても、他の人には再現しにくい。

原因 02

技術選定の理由をその都度記録する運用ルールがない

技術や設計の選定では結論だけを残し、比較した案や採用・見送りの理由を記録していない。判断経緯が残らず、後から同じ検討をやり直す原因になる。

原因 03

引き継ぐ情報の項目や残し方が決まっていない

設計判断の理由や注意点、確認先など、何を残すかが担当者ごとに異なると、引き継ぎが前任者の記憶や説明に依存する。結果として、組織としての知識も蓄積されにくい。

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

属人化した知見を組織の資産に変える設計

改善の目的は、記録を個人の記憶に頼らない状態に変えることです。どこに残すかを決め、
残す手間をなくし、残す内容をそろえる。この3つで、前ページの構造を変えられます。

基本 01

対応に必要な情報を、1か所に集める

対応に必要な記録・資料・やり取りを、業務が動いている場所にまとめて置く。
探す時間が減ることで障害時の初動と判断が早まり、事業継続リスクの低減につながる。

基本 02

記録を、別の作業にしない

対応を進める流れの中で記録が残れば、後回しにする判断が起きにくくなる。
経験が次の開発で使える形で積み上がる。

基本 03

記録の型を決めておく

何を書くかを毎回考えなくて済むよう、残す項目をあらかじめ決めておく。
同じ粒度の記録にすることで、組織としての知見が蓄積される。

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

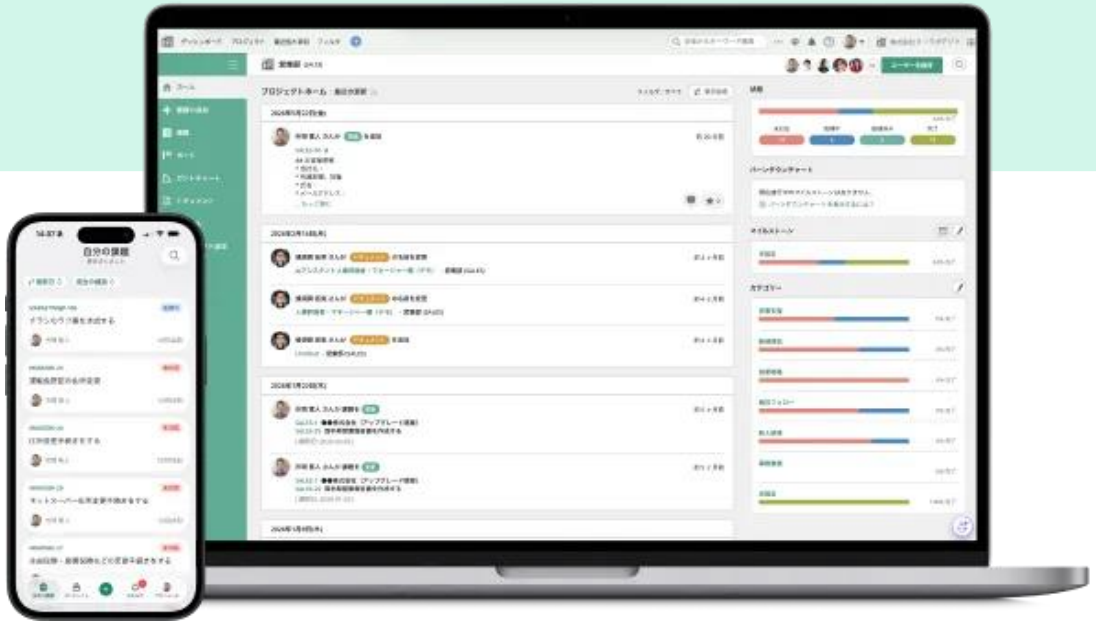
日々の業務を1か所に集約するプラットフォーム「Backlog」とは

Backlogは、仕事を「課題（タスク）」として登録し、担当者・状態・やり取り・関連資料をまとめて管理できる プロジェクト・タスク管理ツールです。

開発部門・開発チーム・関係部署

業務場面

- 障害・不具合対応
- 設計・仕様変更の判断
- 技術選定・判断の記録
- 引き継ぎ関連資料の共有



backlog by nulab

経営層・管理部門

できること

- 進捗状況の把握
- 判断経緯の確認
- 部門を跨いだ状況把握
- 引き継ぎ状況の確認

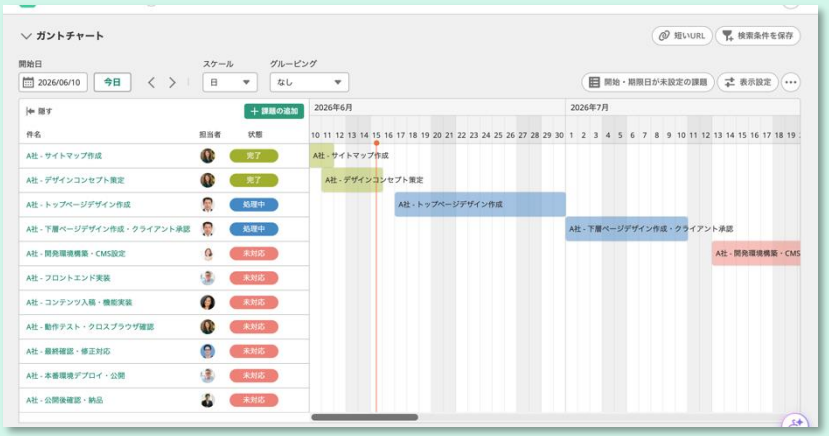
経緯が同じ場所に残るため、個別に担当者へ確認しなくても、経営層や部門責任者が開発・対応状況や判断の経緯を把握しやすくなります。

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

Backlogでできること 1：タスク・ステータス管理

開発工程ごとの業務をはじめ、不具合を「課題（タスク）」として登録・管理。
関係者が同じ画面で担当者・期限・状態を一覧で確認できる状態にします。







親子課題・孫課題*

タスクの作成・割り当て・追跡を効率化

- タスクのステータス管理と優先度設定
- 担当者の割り当てと期限設定
- コメントによるフィードバックと履歴管理

ガントチャート

プロジェクトのスケジュールを視覚的に管理

- タスクの工程とスケジュールを可視化
- ドラッグ＆ドロップで簡単にスケジュール調整
- マイルストーンの設定と進捗管理

ボード

直感的なタスク管理とワークフロー

- ドラッグ＆ドロップで簡単に状態変更
- 作業の進捗状況をビジュアル化
- ワークフローの効率化と可視化

*一部プランのみ使用できます。詳細は料金ページをご確認ください。

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

Backlogでできること 2：コメント・ファイル共有

仕様や不具合対応など業務を進める際に発生する議論や判断理由を、コメント欄に直接記録。
タスクと紐づいて蓄積されるため、メールやチャットを遡らずに、やり取りの経緯をたどることができます。





コメント

タスクに紐づけてコメントを残せる

- 経緯や判断理由をやり取りごと残せる
- 関連ファイルの添付も可能

ファイル

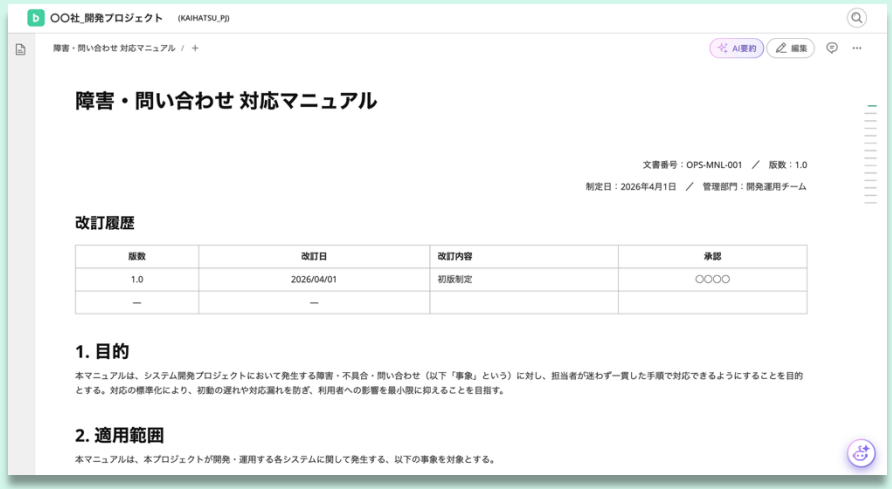
プロジェクトごとにファイル格納

- PDF、画像、エクセル／ワードファイル等を格納可能
- 格納場所を一元化することで情報の散在を防止

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

Backlogでできること 3：ドキュメント・AIアシスタント

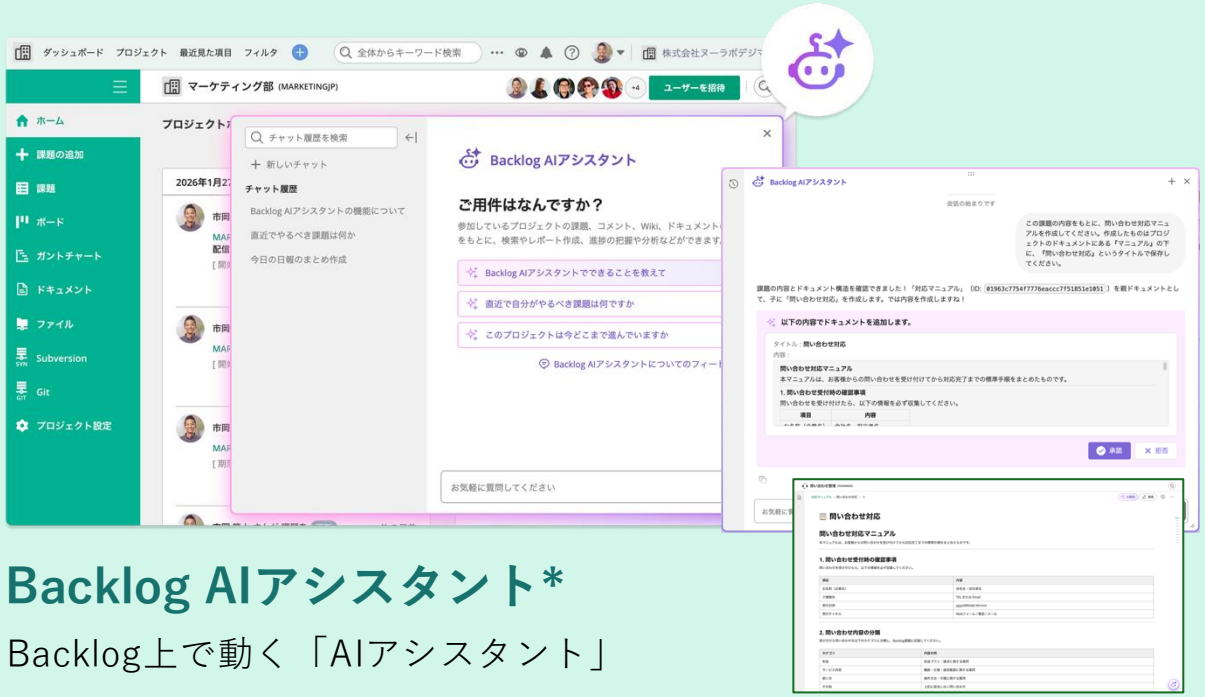
繰り返し聞かれる判断基準や対応マニュアルをドキュメントにストック。
案件の関係者が必要なときに参照できる「組織知」に育ちます。



ドキュメント

チーム内での情報共有とナレッジベース構築

- プロジェクト内の知識を一元管理
- マークダウン記法でドキュメント作成
- 複数人での共同編集と履歴管理



Backlog AIアシスタント*

Backlog上で動く「AIアシスタント」

- 自社の業務の背景や文脈を踏まえてAI回答
- 専用のAIを構築せずに使える
- 進捗管理やレポート作成、人事評価などにも役立つ

*一部プランのみ使用できます。詳細は料金ページをご確認ください。

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

IT・通信業における活用例：情報を1か所に集める

活用例
01

障害・不具合対応

不具合1件につき課題を1つ立て、調査結果、暫定対応、確認結果をその課題に集める。関連するログや資料も添付する。

障害対応の速さが、担当者の経験や在席状況に左右されにくくなる。



©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

IT・通信業における活用例：記録を別の作業にしない

活用例
02

技術選定・仕様変更

チャットツールや口頭ではなく、検討そのものをBacklogの課題のコメント上で進める。決定理由も、見送った案とその理由も、時系列で記録が残る。

一度検討したことが、次の案件の資産として使える状態になる。



©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

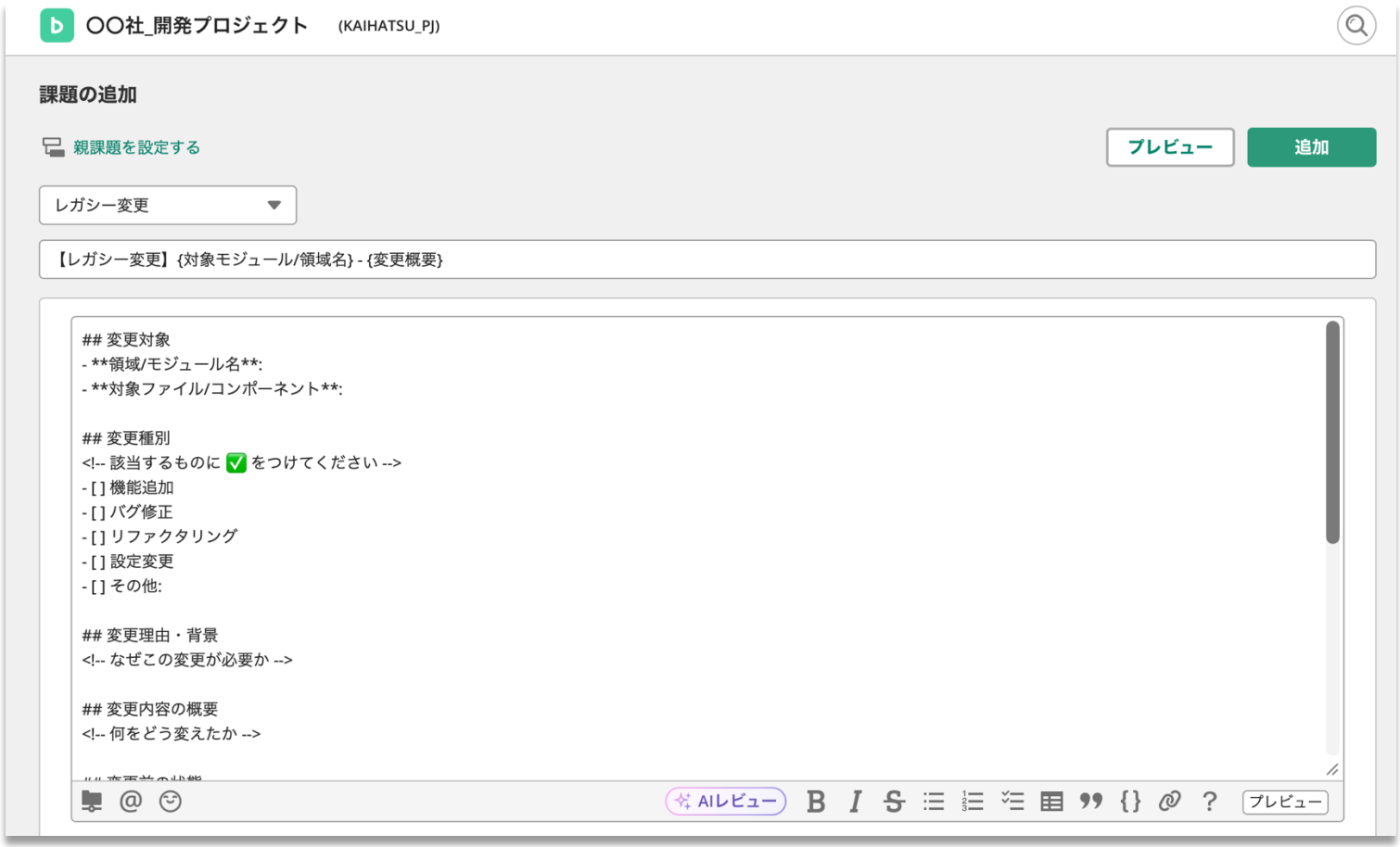
IT・通信業における活用例：記録の型を決めておく

活用例
03

レガシー領域の改修・引き継ぎ

課題テンプレートで「変更内容・選んだ理由・見送った案・確認者」を入力項目として固定する。繰り返し使う注意点はドキュメントに整理する。

引き継ぎの成否が、前任者の説明能力に左右されにくくなる。

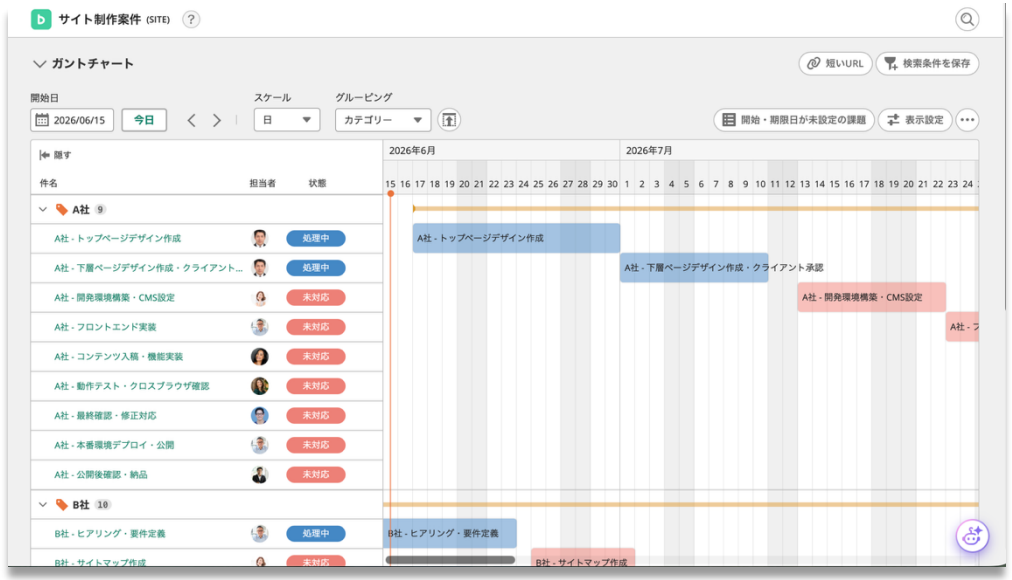


©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

IT・通信業における活用例：記録が集まることで広がる使い方

活用例 04 複数プロジェクト・外部パートナー連携

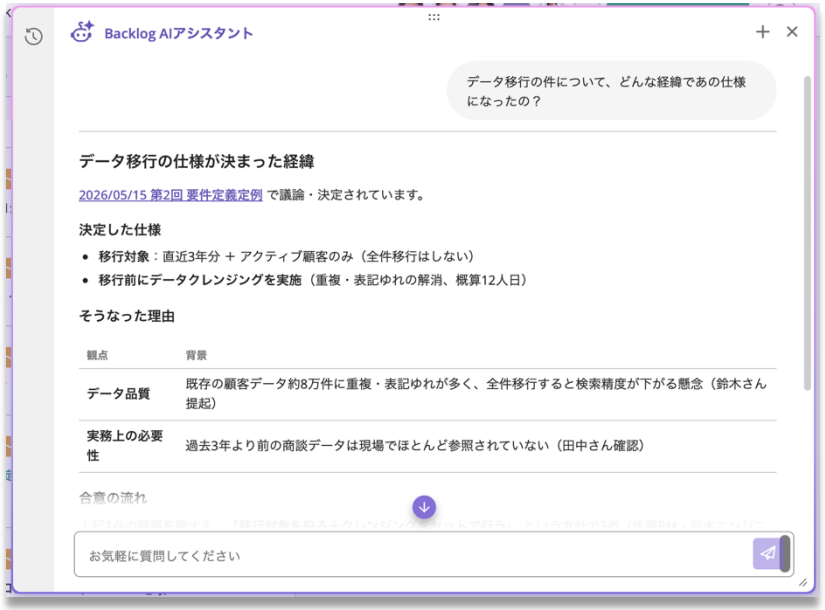
社内外の関係者全員で認識を統一させるために、
ガントチャートで進捗を確認する。



**プロジェクトが増えても、
把握にかかる工数の増え方を抑えられる。**

活用例 05 過去案件の検索・参照

類似案件の対応履歴や判断を、Backlog AIアシスタントに聞く。



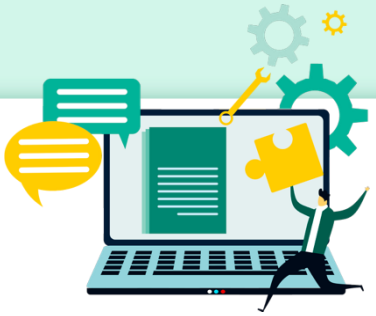
**蓄積した記録をそのままAIが参照するため、専用のAIを
構築する投資をせずに社内の組織知を活用できる。**

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

導入事例①

「情報を探す会議」から「議論できる会議」へ

各ツールに点在していた情報を全社で一元化し、
定例会議の時間を効果的に使えるようになった事例を紹介します。



Case 1

IT業界／全社プロジェクト管理

導入前

- プロジェクト管理の方法が統一されておらず、Slackやスプレッドシート等に情報が点在。各プロジェクトの状況が見えづらく、管理が属人化。
- 経緯と担当者の確認にも時間を要していた。

Backlogの使い方

- 各部門のプロジェクトのタスク管理に全社展開。BacklogとSlackを連携し、Slack上から課題登録を可能に。
- 課題テンプレートを用意し、入力項目を統一した。

導入後

- 情報がBacklogに集約され、進捗・タスク・期日が可視化。情報共有や進捗管理の工数が大幅に削減された。
- 定例会議での状況確認が不要となり、本質的な議論に時間を割けるように変化した。

詳細はこちら

Backlog導入事例はこちらからご覧いただけます

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

導入事例②

「担当者の記憶」から「チームで参照できる履歴」へ

海外企業との共同開発にあたり、外部メンバーとのコミュニケーションを円滑化し、
かつナレッジの属人化防止にも役立てられた事例です。



Case 2

ITオフショア開発／開発部門

導入前

- 他社タスク管理ツールを使用していたが、使いやすさやコミュニケーションの取りやすさに課題があった。
- 受託開発中心で工数が請求に直結するため、効率的な工数管理の仕組みが求められていた。

Backlogの使い方

- Backlog APIによる独自ツールで全プロジェクトの工数・コストを一覧管理。
- カスタム属性でバグの種類・原因を記録し品質管理レポートを作成。
- 顧客とのやり取りは課題コメントに集約。

導入後

- 工数の精緻な管理と品質向上を実現。
- 過去実績の参照により正確な見積り・最適なアサインが可能になった。
- 情報が課題に紐づいて蓄積され、ナレッジの属人化防止につながっている。

詳細はこちら

Backlog導入事例はこちらからご覧いただけます

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

導入事例③

「属人化した業務」から「組織の共通ナレッジ」へ

拠点分散・メンバーの客先常駐という制約の下、管理部門からBacklog活用を広げ、
属人化していた業務を組織の共通資産に変えた事例を紹介します。



Case 3

IT・通信／ システム開発・保守・運用

導入前

- 客先常駐で全員集合は月1回のみ、会議は現状確認と経緯棚卸しに終始し議論の時間が取れなかった。
- 業務が属人化し、過去資料や進め方の確認に手間がかかっていた。

Backlogの使い方

- 課題テンプレートで担当者・期限を必須化しタスク管理を定着させた。
- ドキュメント機能で議事録を事前共有し、会議冒頭から議論に入れる運用を構築した。

導入後

- 会議は報告から議論・意思決定の場へと変わり、会議を待たず日常的に課題が解決するようになった。
- 業務プロセスや意思決定が形式知として蓄積され、暗黙知が組織の共通資産として定着している。

詳細はこちら

Backlog導入事例はこちらからご覧いただけます

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

Backlogが「全社の基盤」になる3つの理由

Backlogは、日々の業務を1か所に集めることで、知見の属人化解消にとどまらず、
全社への展開しやすさ、人数を問わない拡張性、重要情報の安全な共有までを支えます。

理由
01

人数を気にせず
全員を巻き込める

「ユーザー数無制限*」だから
人数が増えても費用はそのまま

ユーザー単位の課金が主流のなか、
Backlogは1契約ごとの定額制です。

人数が増えても費用は変わらないため、各部門はもちろん協力会社まで、必要な人すべてを同じ場所に招くことができます。

*安定運用のため最大10,000人を推奨。
プランにより上限が異なります。詳細は料金ページをご確認ください。

理由
02

全社の情報を
安心して預けられる

ISO/IEC 27001・27017・27018を取得
24時間365日のサーバー監視体制

通信はすべてTLSで暗号化され、データベースは常時別のデータセンターへ複製したうえで日次バックアップを保管しています。

経済産業省やIPAの基準に準拠した
セキュリティチェックシートも公開しています。

理由
03

部門を選ばず
全社に定着する

開発部門から営業・総務まで
職種を問わず使える設計

開発部門はもちろん、営業・人事・総務など、職種を問わず活用できます。

直感的な操作性で導入のハードルが低く、
現場に根づいて全社の共通基盤として
定着します。

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

お気軽にお問い合わせください

属人化による事業継続リスクや開発投資の非効率を抑えるために、
Backlogでできることをご確認ください。

無料トライアルで試す

まずは使ってみる



30日間無料で試す

オンラインセミナーで学ぶ

まずは話を聞きたい



オンラインセミナー

個別相談会で相談する

相談しながら決めたい



個別相談会

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.

会社概要

社名	株式会社ヌーラボ
設立	2004 年3 月
事業内容	チームのコラボレーションを促進するサービスの開発・提供 ● プロジェクト・タスク管理ツール「Backlog」 ● オンラインホワイトボードツール「Cacoo」 ● 組織の情報セキュリティ・ガバナンスを強化するツール「Nulab Pass」 ● ワークフロー自動化ツール「Nulab Flowbase」
本社	福岡県福岡市中央区天神一丁目11番1号

©2026 Nulab Inc. All Rights Reserved.